

衣服交換と命の更新

——ヤーコプ・ビーダーマン『殉教者フィレモン』について¹⁾

橋本 由紀子

1. はじめに

新しい衣服を身に着ける。ただそれだけのことをきっかけにして凡庸な人間が模範的人間に変身する。——現代において、このような話は荒唐無稽だとして、誰も初めから真に受けないであろう。しかし、17世紀初頭、牽強付会ともいえるこのモチーフをふんだんに使って、キリスト教の神の絶対性を訴えるある劇作品が制作・発表された。1618年頃、イエズス会演劇最盛期を代表する劇作家ヤーコプ・ビーダーマンによって制作されたイエズス会劇『殉教者フィレモン』である。この劇に関するビーダーマン自身の考えを示す資料はほとんどないが、この劇を読めば、彼が「衣服交換」に注目し、様々な次元で効果的に使っていることがすぐわかる。この劇の内容はほとんど知られていないため、まずは概要を紹介したい。

主人公フィレモンは、古代ローマ都市アンティノエ²⁾随一の楽士兼役者(コメディアン)として人々から人気を博し、寄食家として享樂的な生活を送っていた。国内でのキリスト教徒迫害が激しさを増したある日、キリスト教徒たちのリーダーであるアポロニウスに、お互いの衣服を交換し、自分に扮してくれるよう依頼される。フィレモンは金貨4枚でその依頼を引き受け、アポロニウスに扮するが、天使たちによる不思議な力も加わることで、外見のみならず心の中も、すっかりキリスト教徒になってしまう。キリスト教信者であることを公言してはばからないフィレモンは、総督アリアーヌスに逮捕される。迫害から逃れるためにフィレモンに扮したことを悔い、フィレモンをかばうアポロニウスも、結局逮捕される。フィレモンが最初に弓矢で射抜かれて処刑される際、フィレモンに向けて放たれたはずの矢がアリアーヌスの右眼に刺さ

1) 本論文は2018年度日本独文学会秋季研究発表会での口頭発表「衣服の交換、命の更新——J. ビーダーマン『殉教者フィレモン』について」の内容をもとに加筆したものである。

2) ローマ帝国統治下ではあるが、アンティノエのある位置はエジプトである。この演劇の時代設定は紀元後303年、ディオクレティアヌス帝が突如キリスト教弾圧に乗り出した頃である。

る。これに激怒したアリアーヌスは、フィレモンとアポロニウスの二人を、斬首刑にする。彼らは首をはねられ命を失うが、天使たちに迎えられ昇天する。フィレモンは亡くなる直前、右眼を失ったアリアーヌスに、自分の遺体のそばの土を右眼にかければ治ると言っていたため、それを思い出したアリアーヌスは、フィレモンの死後言われた通りにすると、右眼が治るといふ奇跡が起こる。これを機に、アリアーヌスはキリスト教へ改宗することを宣言し、一転してキリスト教徒たちを釈放することを決める。『殉教者フィレモン』とは、随所に笑いを誘う場面を含んだ喜劇に始まり、キリスト教徒と衣服を取りかえたフィレモンが唐突にキリスト教徒となり、その後は悲劇の色を濃くしていく悲喜劇³⁾、殉教者劇⁴⁾である。ここで、イエズス会演劇における殉教者劇の存在意義を補足しておくことにする。バロック時代には、「carpe diem（現在を楽しめ）」に象徴される生の明るい楽しみと、現世の儚さという、二つの相反する認識があった。特に後者は、多くのエンブレムを通じて現世の人間存在の不安定さや虚しさ（Vanitas）として表現された。この認識が現世否定につながり、死後の神の国こそ永遠で絶対的なものだという死生観を生じさせた。1618年に起こった三十年戦争で戦場となったドイツ国内が、外国軍兵士による略奪と暴力行為によって荒廃を極めたという時代背景も、現世否定の素地となった。一方、イエズス会の世界観は、肉体的で世俗的なことを抑圧し、克服することで、神から栄誉が与えられると見なし⁵⁾、バロックの死生観との共通点があった。したがって、主人公が現世を否定し死によって神の国へ入り救済されるという殉教者劇は、イエズス会演劇の題材となっても不思議では

3) ハーゲンスによれば、ピーダーマンの演劇作品集では『殉教者フィレモン』の副題が「喜劇（Comodia）」となっているが、イエズス会演劇初期において「喜劇」は「演劇」そのものを意味し、「喜劇」の筋が不幸な結末で終わることも許容されていた。肉体と現世を重要視せず、現世における死を通じて神の国に再生することを善とするピーダーマンの世界観に即して、ハーゲンスはこの劇作品を「喜悲喜劇（comico-tragi-comoedia）」と呼ぶ可能性を示唆している。Hagens, Jan I.: Spielen und Zuschauen in Jakob Bidermanns *Philemon Martyr*. 'Theatrum Mundi' als dramatisches und pädagogisches Prinzip des Jesuitentheaters. In: Daphnis 29(2000) 1, S. 142-149.

4) イエズス会演劇の詩学において、聖人や殉教者の登場は最初から認められていたわけではなかった。ピーダーマンが活躍する以前に、イエズス会演劇において、悲劇への殉教者劇導入を決定的に要請したのは、アレッサンドロ・ドナトゥスとされている。Emrich, Wilhelm: *Deutsche Literatur der Barockzeit*. Königstein/Ts. (Athenäum) 1981, S. 138. [ヴィルヘルム・エムリッヒ（道斎泰三訳）：アレゴリーとしての文学——バロック期のドイツ、平凡社、1993年、272頁。] Szzyrocki, Marian: *Die deutsche Literatur des Barock*, Stuttgart(Philipp Reclam jun.) 1997, S. 307.

5) Van Dürmen, Richard: *Kultur und Alltag in der Frühen Neuzeit*, München(C. H. Beck) 1999, 2. Aufl., S. 134.

ないのである⁶⁾。

「衣服交換」モチーフは殉教者劇である本作で大きな存在感を示しているから、もちろん先行研究においてこのモチーフが見過ごされていたわけではない。ハーゲンスは、イエズス会演劇『殉教者フィレモン』において「世界劇場 (theatrum mundi)」の概念が貫かれている、と主張している。この世界劇場は複雑な構造を内包しており、神が演出家兼観客となり、また世界劇場の只中にいる人間もそれぞれに演技や演出、観劇をする、ということ前置きしたうえで、登場人物たちが衣服を取りかえることを役の交換のひとつと見なす。ハーゲンスは、劇中人物が演出家や役者、観客になるという意味で、役の交換が『殉教者フィレモン』の世界演劇性に寄与する一要素であることを論じている⁷⁾。エムリッヒは、「この衣装交換は、喜劇から悲劇への急展開という美学的現象ともかかわっている。」と述べ、衣服交換モチーフが演劇構造に及ぼす影響力を指摘している⁸⁾。『殉教者フィレモン』に使われている「衣服交換」は、それ自体で実に様々な問題を孕んでいるが、これらの先行研究において、衣服そのものが帯びる意味や効果については取り立てて何も考察されてこなかった。ここであらかじめ、本研究の拠り所である衣服論を概観しておきたい。衣服は一見、新しい服を着たところでその人の内実は変わらないと見なされがちであるが、身に着けた人が他者に対して一定の影響を与えるものである。セイモア・フィッシャー『からだの意識』は、確

6) Szyrocki(wie Anm. 4), S. 310.

7) Hagens (wie Anm. 3), S. 104-156.ハーゲンスは、『殉教者フィレモン』では登場人物たちが何かしらの方法で自分たちの小さな劇中劇を演じていると述べている。登場人物同士が衣服を交換することに関連した具体例として、ハーゲンスは、まず第一幕第10場の、フィレモンがキリスト教へ回心する前の喜劇的場面を挙げている。フィレモンは、ローマ帝国からの使者を巧みな嘘で騙し、この使者から恨みを買う。使者から逃れるため、フィレモンはキリスト教徒クウィリヌスの従者ゲータに対して、自分に扮してくれるように言う。ゲータが使者に見つかったとき、ゲータがフィレモンの代わりに殴打される、という結果に終わる。この場合はフィレモンが演技を計画し、自分はゲータに変装し、ゲータには自分の身振りを練習させるという演出までしている。ゲータはフィレモンを演じる役者となる。またもちろん、ハーゲンスは、第3幕においてアポロニウスがフィレモンと衣服を交換するよう依頼するとき、彼は演技を計画している、と指摘する。この場合は、フィレモンがアポロニウスに変装してユピテルの祭壇に生贄を捧げに行き、アポロニウスは迫害から逃れるためフィレモンに扮することを、アポロニウスが演出家となって計画する。ハーゲンスの見解に沿ってこの場合のフィレモンとアポロニウスを見ると、彼らは世界劇場に立って彼らの現実を生きているだけでなく、劇の中でさらに演技や演出をし、舞台上に立ちながら、さらには演技の成り行きをも見守る観客にもなっている。

8) Emrich (wie Anm. 4), S. 157. [エムリッヒ、前掲書、308頁。]

かにそのような効果を認めている。

結局、われわれが服装を変えるとき変わるの、他ならぬ自分自身の外見であり、かつその意味では、他人の変化を知覚するときよりもはるかにその変化に対して自我関与しているのである。さらに、衣服の着変えは、実際には、外部の観察者にはわからない、触覚的・運動感覚的变化と密接に関連しているのかもしれない。…われわれ誰でも、長い間の試行錯誤を繰り返して、ある種の服装をすることが気分や不安度にまさに影響することを学んでいくのである。…われわれの身メッセージにつける衣服は、他人に対するよりも自分自身に対して、より強力な意味を伝えるものなのである。⁹⁾

この指摘を敷衍して考えれば、人間はかなりの程度衣服によって影響を受けるものであり、元々その人に備った内的本質や素質よりもむしろ、衣服がそれを着ている人を特定の性質や存在に変える、という解釈ができる¹⁰⁾。これを手がかりにして、本研究の仮説を述べると、ビーダーマンの『殉教者フィレモン』における衣服交換モチーフは、どのような救い難い人間であっても、キリスト教という外的環境にまるで衣服でも纏うかのように包まれていれば、キリスト教徒に変わる資格と可能性がある、といった特定の意味づけがなされているように思われる。バロックの時代では、黒衣を着たり、コルセットなどの道具を使って自分の外観を人為的に大きく見せたりすることが好まれたりした。その理由は、病や老いなどの不快、快楽、欠乏を想起させるものとして肉体が忌避されたことによる¹¹⁾。このことと比較すれば、『殉教者フィレモン』の衣服交換モチーフには、単なる肉体否定とはまた違う積極的な意味もあるよう

9) セイモア・フィッシャー：からだの意識、誠信書房、1979年、134頁。

10) このことに関して、次の鷺田清一の言も大きな助けとなる。「ひとは服を着ることによって『だれ』かになるわけですが、逆に服を着ることでその『だれ』を揺さぶったり、他人にたいして偽ったりすることもできます。ときにはじぶんのかげがえのない存在を賭け、ときにはそのイメージと戯れます。あるいはイメージを演じます。…このことは、わたしたちの人生において、存在と演技が厳密には区別できないだろうことを暗示しています。」つまり、衣服を着ることで演技が単なる演技を超えてその人の存在そのものになるという解釈もこの一節から可能である。鷺田清一：ひとはなぜ服を着るのか、筑摩書房、2012年、44-45頁。

11) Alewyn, Richard/ Sälzle, Karl: Das große Welttheater. Die Epoche der höfischen Feste in Dokument und Deutung. Hamburg (Rowohlt) 1959, S. 33-38. [R.アレヴィン/K.ゼルトツレ (円子修平訳) : 大世界劇場——宮廷祝宴の時代、法政大学出版局、41-50頁。]

だ。

本論文では、以上の仮説に基づき、次章以降、フィレモン、アポロニウス、アリアーヌスという三人の重要人物たちに見られる衣服交換モチーフの実践と展開を概観し、最後に衣服交換モチーフの意義を確認したい。

2. フィレモンの衣服交換

楽士フィレモンの陽気な振る舞いが印象的な第一幕とは対照的に、第二幕に入ると、アンティノエの町では、ローマ皇帝の名の下でのキリスト教弾圧が始まる。全町民に、生贄を捧げてユピテルへの信仰を明示するようにとの命令が下り、この町のキリスト教徒たちは信仰を守ろうと決意する。キリスト教徒グループの指導者アポロニウスは、表向きキリスト教の信仰を守ろうと信者たちに訴える。だが、第三幕になると、アポロニウスは弾圧と処刑に近い将来自分の身に直接降りかかることを恐れる。彼は不安に押しつぶされる思いを抱き、自分だけはどうにか助かろうという考えに至る。そこにフィレモンが彼のそばを通りかかる。アポロニウスはフィレモンに、互いの衣服を交換し、フィレモンがアポロニウスに扮してユピテルに生贄を捧げに行き、報酬を金貨で払うから自分のために急場をしのいでくれるよう依頼する。

アポロニウス

この芝居を打つのに、お前は私の服が要るだろう。

さあ、お互いの服を交換しようではないか。

フィレモン

はっきり言って、これは俺には土台無理な話だ。

だって、取り替えた服を着たら、俺は不運になっちまう。

今でもまだ覚えているが、前に他人のマントを肩に羽織ったときのことだ。

俺がこのマントをまとうやいなや、

俺は棒で殴られた衝撃を受けたのさ。

俺がこれを羽織れば、

今回はひょっとしたら女神様が俺に味方してくれるのだろうかね。

アポロニウス

その償いに、

さっきの3ターレル金貨にさらに一枚上乗せしてやろう。

フィレモン

そういう提案なら俺は受けるぜ。さあ、俺と一緒にこっちへ来な。

俺があんたの服を着て、あんたが俺の笛を持つんだ。

そうすれば、あんたの命は守られるさ。 (III, 1)¹²⁾

このように第三幕においてアポロニウスと契約を結んだフィレモンは、次の第四幕でアポロニウスのキリスト教徒の服を着て生贄を捧げに行こうとする。すると、天使がフィレモンの前に突如現れ、キリストにこそ生贄を捧げるよう語りかける。

フィレモン

そこにいるのは誰だ？ 苦しい！ なんて苦しいんだ！

天使

フィレモンよ、立ちあがるために

倒れるがよい。私はもうお前を

驚かせたりしないつもりだ。愛でもって私はお前を呼び寄せよう。

ああ、我がフィレモンよ！ 4 デナリ（の金貨）のせいでお前は

敵であるユピテルに捧げ物をする。だが—それが何になろうか！

たとえその宝がお前を救うにしても、

お前がその宝を失っても、大したことがない。キリストにこそ生贄を捧げよ、

そうすればお前は天国を手に入れることになる。それは何と価値の高いことであろうか！

...

ああ、我がフィレモンよ、キリスト教徒のふりだけをするのをやめよ、

お前が真似ているものになり始めるのだ。

あんな荒れた地獄の獣の所へ行けばどうなるか、

神がお示しになられる！ そして、この冠をすぐに

お前の頭に載せよう！ フィレモン、何という喜びの力が、素晴らしいことが、

12) 第三幕第1場を表す。以下、幕と場については同様に表示する。『殉教者フィレモン』からの引用は、次のラテン語とドイツ語の対訳版から行った。翻訳に際しては、ラテン語テキストから正確にドイツ語訳されているかを確認しつつ、ドイツ語訳から訳出した。Jacob Bidermann: Philemon Martyr. Lateinisch und Deutsch. Herausgegeben und übersetzt von Max Wehrli. Köln & Olten(Jakob Hegner) 1960.

お前を待ち受けていることか！

… (IV, 1)

天使はフィレモンにまず、「立ちあがるために倒れるがよい」と命じる。天使の言う「立ちあがる」は、キリスト教徒として生まれ変わるということとも解釈可能である。だとすれば、天使の威光にフィレモンが気を失いかけ転倒することは、単なる転倒だけでなく、異教徒としての象徴的死も意味している。さらに天使は、「キリスト教徒を真似るだけのふりをやめよ、お前が真似ているものになり始めるのだ」と命じる。キリスト教徒の衣服を着るという外見上・身体上の行為が精神面にも影響を及ぼし、キリスト教信仰に向かわせる——こうした衣服の効果を天使はキリスト教の神に代わって言明する。

フィレモンは、次の第四幕第2場で正気に戻り、ローマ帝国の在来の神々を信じていた従来の自分の来し方を振りつつ悔悟し、イエスへの帰依を誓言する。

フィレモン

ああ！イエス様、イエス様、イエス様。ああ、俺はいったいどうなってしまったのだろう？

イエス様！俺はどうなってしまったのだ？我がイエス様、あなたは誰ですか？

おお、あなたが、イエス様？イエス様のことを何も知らない限り、

俺の世界はなんて乏しかったことだろうか。イエス様を知らなかったあの頃を思うと、

俺の心は苦しくなる！ああ、かつて俺は

イエス様を愛する代わりにイエス様から逃げ、イエス様を信じることを嫌がっていた！

イエス様を愛そうとしなかったあの時が忌々しい！ (IV, 2)

こうしてフィレモンは、これまでの異教徒および楽士としては死を迎え、キリスト教信者として生まれ変わる。ここでさらに注目すべき点は、フィレモンが衣服交換の直後に感じた不快感ともいべき感覚である。

フィレモン

こんな服に押し込められるとは、煩わしいったらありゃしない！

普段はカササギよりも身軽な俺だが、

今は大股で歩かなくてはならん。

これじゃあまるで、ただの町人の息子が演者になって、

悲劇でもやってアガメムノンを演じているみたいだ。(III, 5)

普段は身軽なフィレモンが、アポロニウスの衣服を纏った途端、大股で歩かねばならないほどだと言っている。つまり、フィレモンがその衣服に重さ、さらに言えば普段と異質な感覚を感じていることになる。新しい衣服によって引き起こされる触覚的变化は、フィレモンが別人格に変わるためのスムーズな転換点となっている。このことを検討するにあたり、イエズス会の創設者イグナチオ・デ・ロヨラ（1491-1556）の『ある巡礼者の物語』（1553-55）のある一節が参考となる。衣服の変化が外見のみならず、精神にまで及ぶ効果が垣間見られるからだ。イグナチオは貴族の生まれで武人であったが、三十歳の頃、1521年のパンプローナの戦いで、砲弾を受け片足全体が砕けるほどの重傷を負う。長い療養生活の間、彼は2冊の宗教書を読んだことがきっかけとなり、聖人たちがしたことを自分もしてみたいという思いに駆られ、信仰中心の生活を送ること、全快したらエルサレム巡礼を行うことを決意する。その後、彼は自宅ロヨラ城を去り、信仰の世界へ足を踏み入れ、まずは告解をするためにモンセラートを目指す。モンセラート到着の直前、彼は巡礼生活のための衣服を用意する。

モンセラートの少し手前にある大きな村に着いた。そこで、エルサレム巡礼のときに着ようと決めていた着物を買おうと思った。そこで、布地を買った。それは普通、袋を作るためのもので、非常に粗く織ったもので、肌ざわりの悪いものだった。この布で脚までとどく大きめの服をすぐに作らせた。¹³⁾

信仰生活に入る武人としてのイグナチオは、虚栄心が強く、名誉を追い求め見栄えに注意を払う男だった¹⁴⁾。身にまとう衣服にも、彼は相当なこだわりを持っていたと思われる。その彼が、「袋を作るためのもので、非常に粗く織ったもので、肌ざわりの悪い」布地を取って選び、エルサレム巡礼の際にそれに着替えようと考えていた。そこには彼の新たな人生と巡礼生活への決意が窺える。イグナチオは、不快感と言っても過言ではない肌触りの悪さこそが、彼を修行者へ抜本的に生まれ変わらせてくれる効果があると期待していたと思われる。

13) イグナチオ・デ・ロヨラ（門脇佳吉訳・注解）：ある巡礼者の物語、岩波書店、2000年、44頁。

14) イグナチオ・デ・ロヨラ、前掲書、15、18頁。

この後イグナチオは、「今まで来ていた騎士の衣を脱ぎ、キリストの武具を身につけることを決意」し、モンセラートで総告解を終える。次の目的地マンレサへ向かう前に、彼は以下の行動に出る。

一五二二年三月二十四日聖母のお告げの祝日の前夜、できるだけ人に知られないように夜になって、乞食を見つけ、それまで身につけていた衣服を全部脱いでその乞食に与えた。それから、自分で望んで作らせた服を着て、聖母の祭壇の前で脆いた。¹⁵⁾

この「自分で望んで作らせた服」は、ここではとりたてて詳しく述べられてはいないが、後のエルサレム巡礼のためにモンセラート到着直前に作らせた肌触りの悪い例の服と別物なのである。だが、ここでは、イグナチオがいよいよキリスト教への信仰を深めるにあたって、彼の決意を明確に示すかのようについに衣服を粗末な修行者のそれに取り替えた所作そのものが重要である。イグナチオは自らの心の変化を衣服の変化で表そうとするが、それと同時に、修行者の衣服を纏うと同時に生地から受ける新しい感触も、当然彼の決意をさらに強固にしたことだろう。

以上のようなイグナチオの行動は、衣服を換えることで騎士から修行者へ役割を換えたという見方もできる。これをフィレモンの場合に当てはめてみると、どうだろうか。『殉教者フィレモン』において、そもそも彼は笛を演奏する楽士であると同時に、役者（コメディアン）として設定されている。役者には様々な役に扮し何者にもなれる可変性がある¹⁶⁾。つまり、そもそもフィレモンは特定の信条を持たず、外部から一切影響されない揺るぎない性質や実体を持たない人物である、と見なすことができる。アポロニウスの依頼に応じて一時的に彼はキリスト教徒のふりをしたつもりであったが、本当にキリスト教徒になってしまったのは、そもそも彼が実体を持たないからこそ、キリスト教徒の衣服の効果が如実に現れたのである。キリスト教徒アポロニウスの衣服が普段とは違う感触をフィレモンに与え、この感触に影響を受けたフィレモンが新しいキリスト教信者として誕生したのである。

3. アポロニウスの衣服交換

一方、キリスト教徒迫害を恐れ、フィレモンに衣服交換を依頼したアポロニウスの

15) イグナチオ・デ・ロヨラ、前掲書、47頁。

16) Hagens(wie Anm. 3), S. 117.

場合はどうだろうか。この劇で彼はまずアンティノエの町のキリスト教徒たちのリーダーとして尊敬を集めている人物として描かれる。だが、この町でキリスト教徒迫害が始まるや否や、逮捕された後に行われる残酷な処刑を恐れ、身を隠そうとする。表と裏の顔が全く違う人物像は、ビーダーマンの代表作の表題名でもあり、表面上尊敬を集めているが真の姿はその正反対である偽善者ツェノドクスを彷彿させる。第四幕第5場でアポロニウスはフィレモンと衣服を交換した後、誰にも見つからないように身を潜め、フィレモンが自分の代わりにユピテルへの生贄を捧げてくれたかどうか、疑心暗鬼に陥る。この後、アポロニウスは、フィレモンを探し回っていたローマ皇帝側の使丁ドローモとレラップスに見つかり、フィレモンと見間違われる。だが彼らは、すぐにフィレモンとは別人だと見破り、フィレモン本人が見つからないことへの悪態をつき、その場を去る。アポロニウスは、フィレモンが自分の身代わりの役を果たさなかったのではないかと疑念にとらわれていく。

フィレモンが総督アリアヌスに捕えられ尋問を受けていることも知らずに、アポロニウスは自らが行った衣服交換を後悔する。そしてアポロニウスは、フィレモンに自分の服を返してもらい、自分こそが牢屋に入るべきだと思い至る。

アポロニウス

私は死なないために逃げたのだ。だが、こうしているうちに一体何ができたというのか？この惨めな私は、拘留されないで済んでいるが、私の代わりに別の人間が拘留されているのだ。それと知らずに私はイエス様に一人のキリスト教徒をお送りし、私は自ら行方知れずとなっている。フィレモンは今、かつてのフィレモンではなく、この私が今、フィレモンなのだ。牢屋の中で彼はイエス様を心の支えにし、私とさえここでこうしてイエス様におすがり出来ない有様だ。お前たち笛よさらばだ、私にはお前たちはもう要らないし、フィレモンももうお前たちを必要としない。彼に私の服を返してもらい、この私が牢屋に入り、再びイエス様を取り戻すことにしよう。死ぬべきはこの私、アポロニウスの方だ。

(IV, 8)

アポロニウスは第四幕第8場で自ら牢屋に出向いて自首し、第五幕第5場でアリアヌスから尋問を受け、即座にキリスト教徒として有罪とみなされる。以上の諸場面

を概観すると、アポロニウスの場合はキリスト教徒の衣服を言わば脱ぎ着していたも同然と言ってよいだろう。脱ぎ着については、例えば新約聖書に、「あなたがたは、古い人をその行いといっしょに脱ぎ捨てて、新しい人を着たのです（『コロサイ人への手紙』第3章第9-10節）」とあるように、キリスト教への入信に密接に関連した脱ぎ着のメタファーが散見される¹⁷⁾。イエズス会関連では、ルイス・フロイス（1532-97）の『日欧文化比較』（1585）にも衣服の着脱とそれに関連した叙述がある。フロイスの日本についての報告は、16世紀当時の日本人の習俗にはじまり宗教、医療、芸術、経済など、幅広い視野でなされているが、全14章ある内の最初の3章分が、日本人の男女と子供の外見についての記述で占められ、特に衣服についての記述が多い。その中でも、大人子どもに関わらず共通してフロイスが指摘するのは、脱ぎ着が容易であると思わせるほどの日本人の衣服の緩さである。

われわれの衣服は身体にぴったり合い窮屈である。日本の衣服はきわめて緩やかなので、容易にそして恥ずることなく、すぐに帯から上、裸になる。¹⁸⁾

ヨーロッパの女性は帯をきわめてきつく締める。日本の高貴の女性は大そう緩くしめるので、いつも垂れ下がる。¹⁹⁾

われわれの間では子供は、狭い、肩の締まった袖をつけている。日本の子供はきわめて広い袖をつけている。その袖は腕の後ろに斜めに劈けている。²⁰⁾

フロイスの『日欧文化比較』において、日本人の衣服交換を直接述べた箇所は全くない。だが、フロイスが衣服の緩さに着目したのは、彼が衣服交換につながるある特定の思考の枠組を持っていたから、とも推測できる。緩い衣服は、すぐに脱ぐことができ、新しい別の衣服に着替えることができる。フロイスの目から見れば、当時の日本人は仏教を信仰しているが、その仏教を担う僧侶たちは率先して墮落した生活を送

17) その他、「主イエス・キリストを着なさい（『ローマ人への手紙』第13章第14節）」、「バプテスマを受けてキリストにつく者とされたあなたがたはみな、キリストをその身に着たのです」（『ガラテヤ人への手紙』第3章第27節）」など、着衣のメタファーも多い。なお、新約聖書の訳文はすべて、日本聖書刊行会発行の聖書新改訳（1973年）から引用した。

18) ルイス・フロイス（岡田章雄訳注）：ヨーロッパ文化と日本文化、岩波書店、1991年、22頁。

19) ルイス・フロイス、前掲書、46頁。

20) ルイス・フロイス、前掲書、69頁。

っていた。彼らは、西洋的・キリスト教的文化圏の見地からすれば、奢侈に流れ男色や売色をする宗教的指導者たる資格すらない人々であった。そのような墮落した者たちが主導する仏教から日本人を何としてでも救わねばならないという使命感に、フロイスらイエズス会士たちは駆られていた。日本人の改宗可能性を探る際、フロイスはもちろん日本人の高い理解力を評価しているが、彼らの纏う緩やかな着物にも着目したのだろう。イエズス会創設者イグナチオが行ったような衣服交換がキリスト教への帰依、さらにはキリスト者への生まれ変わりを明白に表す行為だとフロイスが潜在的であれ認識していたとすれば、多くの日本人を改宗させ、墮落した仏教から彼らを救済できるという希望を、すぐに着脱可能な日本の衣服にフロイスは見出していたのかもしれない。

こうしたフロイスの衣服の脱ぎ着の効用から『殉教者フィレモン』のアポロニウスの行動を検討すると、以下の通りである。ピーダーマンは、アポロニウスにキリスト教徒の衣服を一旦脱がせ、一時的ではあれ棄教という裏切りまでさせる。だが、逃亡潜伏生活中、フィレモンの衣服が、何者にもなれるという可変性を持つ役者の特性をアポロニウスに与えたことも予想できる。アポロニウスは、フィレモンの衣服を着ることで、逃亡生活で精神的に不安定には陥るが、その後本来の自分の衣服を取り戻そうと思い直し、悔悛の念を抱き、再びキリスト教徒としての自覚を持つからである。ピーダーマンは、一度は過ちを犯しても自ら改心して容易に再び正しい道に戻れるということを、アポロニウスの衣服の脱ぎ着を通して効果的に描いている。だが、ここでさらに注目し得るのは、フィレモンとアポロニウスが運命を交換および共有することである。このことは、生前最後にフィレモンがアポロニウスに語った「俺は幸せ者だ、フィレモンからアポロニウスになったのだから。(V,8)」という言葉にも象徴的に表れている。アポロニウスの衣服は、自分とフィレモンにキリスト教徒としての殉教死を運命づける。別言すれば、一着のキリスト教徒の衣服をフィレモンとアポロニウスの二人が着ることで、彼らは血の洗礼という同じ結末を迎える²¹⁾。第五幕において、フィレモンとアポロニウスは、総督アリアーヌスによる死刑判決の結果、二人とも斬首刑に処せられる。キリスト教徒として亡くなった二人を、天使が祝福する(V,9)。同時に彼らは殉教という血の洗礼を受けることで、真正のキリスト教徒として認められる。フィレモンは正式な洗礼を受けていないので殉教死によって正式にキリス

21) 衣服を交換することで運命をも交換し共有するというモチーフは、イエズス会学院出身のコレネイユ作『テオドール』にもみられる。藤井康生：失墜したバロック演劇、『テオドール』—バロックと演劇(XI)一、大阪市立大学文学部紀要『人文研究』第45巻第9分冊、1993年、25頁。

ト教徒になり、アポロニウスは神を一度裏切ったのでその罪を自らの血で洗い流し、もう一度洗礼をし直したたからである。

フィレモンとアポロニウスは、衣服を交換したり、本来のキリスト教徒としての衣服を取り戻そうとして行動することで、キリスト教徒として生まれ変わる²²⁾。だが、衣服交換の効果はそれだけに終わらず、来世での転生にまで及ぶ。現世で彼らはそれぞれ新しい衣服を手に入れる、あるいは、手に入れようと決意することで、新しい身体を手に入れる疑似体験をする。この疑似体験を経て、彼らの魂は来世における転生のための魂の容れ物、すなわち新たな身体を求める。『殉教者フィレモン』では、衣服は彼らにとって新たな身体の表象²³⁾であり、キリスト教徒として信仰上の願望を成就するために不可欠なものとして位置づけられている。

4. 衣服交換から派生したモチーフ「血の洗礼」

ところで、フィレモンとアポロニウス以外にも、キリスト教徒として「生まれ変わった」重要人物がいる。彼らの命を奪った総督アリアヌスである。彼の場合はキリスト教徒の衣服を着て回心したのではないから、前述の両者と同列に論じるのは適切でないかもしれない。しかし、同じ人物が登場当初とその後で全く様変わりしたという点では、アリアヌスにも注目しておかねばならない。最初にアリアヌスは、アンティノエ内のキリスト教徒を逮捕し罰するローマ帝国の総督、いわばキリスト教徒の敵として登場する。フィレモンとアポロニウスを逮捕し、死刑の判決を下し、フィレモンを矢で処刑する際、彼は部下ドロモから不可解なことが起きているという報告を受ける。フィレモンに向けて放たれた矢が全く刺さらず、フィレモンが無傷のままである、というのである。ドロモはこの不思議な現象についてさらにこう報告する。

ドロモ

22) フロイントは『殉教者フィレモン』について次のように指摘する。「もっとも、この殉教者劇は厳密な意味では悲劇とはいえない。フィレモンは命を落とすけれども、それは死してなお不死となるためにほかならない。キリスト教信仰が議論の余地なき最高の価値だというのであるから、ここにはほんとうの意味で価値の葛藤は存在しない。殉教者演劇は、悲劇というよりむしろ救済劇だ。」Freund, Winfried: *Abenteuer Barock. Kultur im Zeitalter der Entdeckungen*. Darmstadt(Primus) 2004, S. 201. [ヴィンフリート・フロイント (佐藤正樹/佐々木れい訳) : 冒険のバロック——発見の時代の文学, 法政大学出版局, 2011年, 352頁。]

23) 詳細は本論文第5章を参照。

矢で射られている間、あいつは傷一つつかないで、
笑みを浮かべてあいつは矢がうなるのを見ているんですよ。弓がうなり、
あいつが虚空に向けて「イエス様」と叫ぶんです。するとすぐ、
矢がすべて落っこちたり、空中を違う方へ飛んで行ったりするんです。 (V,6)

今や主人公フィレモンはすっかりキリスト教徒となり、神の奇蹟を体現するいわば憑代のような役目すら果たしているかのようである。その様子を見に行ったアリアーヌスは、フィレモンを処刑するはずの矢が自分の右眼を刺さり、取り返しのつかない大怪我を負う。一方のフィレモンは礫にされた状態から、右眼を治す手立てを忠告する。

アリアーヌス

おお、俺を救ってくれ、この痛みに俺は殺されそうだ！

フィレモン

痛みがあんたを殺すことはないよ。だが、俺が死んだら、
俺の墓のある丘へ逃げ、そうして、あんたがイエス様のお名前を叫んだら、
そこから少しの土を取って、あんたの身体の傷ついたところへそれを撒けばいい
—

そうすりゃあんたの目は治るさ。 (V,7)

この後、最終的にフィレモンはアポロニウスと共に斬首刑に処せられ亡くなる。二人の遺体はクウィリヌスによって引き取られ、彼の邸内に安置される。アリアーヌスはフィレモンが死の直前に言ったことを思い出し、すぐに血まみれのフィレモンの遺体のそばにあった土を自分の右眼に振りかける。

ストラックス

総督様が土を取って

傷におかけになって、キリスト教徒たちがよく唱える名前をお唱えになられると
たちまち、

あの傷が癒えた、傷ついたあの目が甦った、総督様の目が治った！

アリアーヌス

イエス・キリストよ、汝は神だ、汝が神だということを、私はついにはわかった。お前たち邪神どもよ、ここから去れ、私にとってはイエス・キリストこそが神。おお、神なる存在よ、私にとってその存在は唯一無二！

イエス・キリストよ、私は今まで間違った認識をしていた、この罪を許したまえ、そして、私が行った罪深い殺戮を許したまえ。（V, 11）

こうしてフィレモンの遺体から出た血がついたであろう土は、アリアーヌスの右眼を完治させる。アリアーヌスは神による奇蹟を自ら体験することにより、右眼の大怪我という彼にとって最大の身体的不安の源が完全に振り払われる。この瞬間、彼はユピテルをはじめとした従来の神々が、人智を超えた存在であるにもかかわらず、何の奇蹟も起こさず、救いの手を少しも差し伸べることをしない、いわば矛盾した存在であることを無意識に感じ取り、目の覚める思いに至ったのだろう²⁴⁾。彼は、痛みや病などの身体にまつわる不安を解消してくれるキリスト教を認め、「イエス・キリストを今までは憎んでまいりましたが、それと同じくらいに今度はイエスを愛します。(V, 11)」と言い、回心する。すでに述べたように、アリアーヌスの場合、単純にキリスト教徒の衣服を着て急激に回心したのではない。彼はフィレモンの遺体のそばの土を自分の身体の一部（右眼）に振りかけただけである。フィレモンはキリスト教徒の衣服の効果でキリスト教徒になる。次に神秘的な力がフィレモンの身体に備わる。斬首刑によってフィレモンが殉教し、血の洗礼を経て、その魂が昇天し天国に転生する。その後、神聖さを帯びた真正のキリスト教徒としてのフィレモンの死体から流れ出る血が、彼の遺体のそばの土に当然滴ることは想像に難くない。フィレモンの血がついた土は即座に奇蹟を起こし、アリアーヌスの右眼が完治する。ここに至って、着るだけで不思議な現象を起こす衣服というモチーフは、単純にその衣服を着た人間を様変わりさせるだけにとどまらない、さらなる展開を見せている。まず新しい衣服によって、外見のみならずその人物の精神、さらには身体が変質する。その衣服を着た人物の身体ならびにその一部（この場合は血）が神秘的な力を帯び、他者にとって回心を促すほどの強力な呪物になる。アリアーヌスが回心する場面では、衣服同様血も回心の伝播を

24) 『殉教者フィレモン』では、イエズス会学院に学んだ経歴のあるコルネイユの『ポリュークト』のように、キリスト教とローマの在来宗教を比較し両者の優劣を登場人物が論理的に述べる場面はほとんどない。だが、その代わりに、ユピテルやその取り巻きの神々が時折登場して自己保身の姿を曝したりするなど、間接的に在来宗教の神々の威厳のなさや信憑性の薄さを表現している。

担っている²⁵⁾。こうしてビーダーマンは、新しい衣服の影響力がそれに関わった人物たちに次々と伝播していく様を描いている。「人の考える小ざかしい手立てなど、偉大なる力に向かっては、一切が徒労のわざである」²⁶⁾ことを証明するかのようになり、アリアーヌが行ったユピテルへの生贄の強要とキリスト教徒迫害は、キリスト教の神という偉大な存在を前にして無意味だということを、ビーダーマンは主張しなかったであろう。衣服交換モチーフの持つ効果をさらに血の洗礼と回心の伝播にまで展開させることで、ビーダーマンはイエズス会演劇作者として、キリスト教の正当性を鮮やかな演出で描いてみせたかったのであろう。

5. 最後に

以上、『殉教者フィレモン』における「衣服の交換」が登場人物たちの身体に及ぼす効果や、作中の衣服交換モチーフの展開を考察してきた。主人公フィレモンたちのこの演劇における人物像の変化を振り返るにあたり、新たな身体という観点、および、衣服が身体の延長であり代用であると拡大して考える観点も指摘しておきたい。矢内原忠雄は、キリスト教を信仰することによる身体の復活を以下のように述べている。

キリストによる罪のあがないの効果は、人間の身体にも及ぶ。[...]身体は霊の宿る器であり、霊の強き影響の下にある。したがって人が罪をおかして神に背反している状態にあつては、その結果として身体の死を招いたのである。しかるに人の罪が赦されて、神への背反がいやされ、聖霊による新しい生命が人の中に宿される時は、その効果は身体そのものの救いにまで及び、信仰によりて宿された神の霊は、人の死ぬべき身体をも活かす力をもつのである。というのは、新たな生命の霊は、その器としてふさわしい新たな体を必要とするからである。かくして、キリストを信ずる者には身体復活の希望が与えられ、この復活の希望は、死の恐

25) 回心の伝播は、『殉教者フィレモン』のみに描かれているのではなく、例えばコルネイユの『ポリュクト』の最終場面にも見られる。まず、ポリュクトが殉教死し、妻ポーリーヌが夫の刑死に居合わせたため夫の血を浴びてキリスト教徒になる。ポーリーヌの父で、義理の息子ポリュクトを死に追いやったフェリックスも、ポリュクトの流した潔白な血を目の当たりにしてその死に様に感銘を受け、キリスト教に改宗する。岩瀬隆他訳：コルネイユ名作集、白水社、1975年、288-289頁。

26) カルデロン（高橋正武訳）：人の世は夢・サラメアの村長、岩波書店、1978年、182頁。

怖と死別の悲しみを克服させる。²⁷⁾

上記の矢内原の言によると、キリスト教を信仰すれば、信仰によって宿された神の霊がその器としてふさわしい新たな体を必要とし、身体復活の希望が与えられるという。このとき、もし衣服を身体の延長として見なすならば、衣服こそ新たな体と身体復活の希望を具体的に実感する便利な道具となることは言うまでもない。衣服交換は、キリスト教への回心によって新しい身体を獲得し、新たに生まれ変わることを象徴する、と言ってよいだろう。そして、『殉教者フィレモン』における衣服交換モチーフは、フィレモン、アポロニウス、アリアーヌスの三者それぞれの人物像の中に、様々な変奏を見せつつ効果的に使用され、三者三様の生まれ変わり、命の更新の様相を引き立てている。肌に直接触れるものが衣服であるか、あるいは血であるか、という違いこそあれ、フィレモンをはじめとした主要人物たち三人は、触覚を通じて回心前の古い身体を死に追いやり、キリスト教徒としての新しい身体を獲得する。

確かに、衣服交換のモチーフはバロックの「感覚は欺く」²⁸⁾ということを実証するための単なる小道具に過ぎない、という指摘もあるだろう。また、衣服交換モチーフはあくまでイエズス会の立場に則ったものに過ぎず、キリスト教を正当化するための装置でしかない、との見解もあるだろう。しかし、『殉教者フィレモン』の衣服交換のモチーフを検討すると、このモチーフが持つ外的・呪物的影響力は、単に「感覚は欺く」ことを皮相的に表現するレベルをはるかに超えている。衣服交換は、仮面装着や仮装、変装にも敷衍すれば、それはまず本来の自分でない新しい役を演じるということになる。しばしばバロックの演劇に登場する成り済まし的人物は、欺瞞の世界と現実の世界という二つの世界を観客に見せている²⁹⁾。だが、主人公フィレモンたちは、単純に衣服を取り替えて別人に成り済まし、観客に分裂した世界を見せる程度にとどまっていない。個々人に生来備わっている不変の実体などというものはなく、人間は外見も精神もいかようにでも変わるものであり、外部から投げかけられることばによるラベリングなど、個々人を取り巻く諸環境がその人を形成することを、極端な形ではあるものの、フィレモンたちの変化は端的に示している。その中でも特に衣服は、「ひとが動くたびにその皮膚を擦り、適度に刺激することでひとにじぶんの輪郭を感じさせるもっとも恒常的な装置」で、「眼で見ることはできない身体の輪郭が、触覚のかたちで

27) 矢内原忠雄：キリスト教入門，中央公論新社，2012年，103－104頁。

28) Alewyn / Sälzle (wie Anm. 11), S. 49. [R.アレヴィン/K.ゼルツレ，前掲書，67頁。]

29) Alewyn / Sälzle (wie Anm. 11), S. 64f. [R.アレヴィン/K.ゼルツレ，前掲書，89－91頁。]

確認でき」、「うつろいやすいイメージとしての身体から滲み出る不安をそっと鎮めてくれる」³⁰⁾ものである。衣服こそ、着る人の自己の身体と精神のイメージをつなぎ合わせてくれる働きがあり、着る人を形作る無条件の強制力とでもいうべきものを持つ。不安定で不確かな人間存在に対し、外側から新しい「自己同一性」を与えて安定させる衣服交換モチーフが使われている『殉教者フィレモン』は、今から400年以上前の古い劇作品であるが、個々人が「生来の自己同一性」を持っているのかどうか不確かな現代を生きる我々にとっても、大いに示唆的で刺激的な問題を提示してくれている。

30) 鷲田清一，前掲書，31頁。

Der Kleideraustausch und die Neugeburt eines menschlichen Lebens

– Ein Versuch über Jakob Bidermanns *Philemon Martyr* –

Yukiko HASHIMOTO

Philemon Martyr (1618) von Jakob Bidermann, der einer der bedeutendsten Jesuitendramatiker war, stellt dar, dass der christliche Glaube den höchsten Wert hat. Dazu benutzt Bidermann das Kleideraustausch-Motiv, das recht gewaltsam aussieht, weil ein Flötenspieler und der Mime Philemon, der die Hauptfigur dieses Spieles ist, nur einmal das Kleid eines Christen trägt und dann gleich zum ernstesten Christen wird. Bidermann benutzt wirkungsbewusst das Kleideraustausch-Motiv in *Philemon Martyr*.

Das Kleideraustausch-Motiv ist in *Philemon Martyr* ausgeprägt, deswegen wurde es bisher auch nicht übersehen: Jan L. Hagens behandelt das Motiv unter dem Aspekt des barocken Welttheaters, des Spielers, des Zuschauers und der Comicotragoedia. Wilhelm Emrich weist den Einfluss dieses Motivs auf die Struktur des gesamten Spiels *Philemon Martyr* hin. Aber trotzdem hat die Forschung bisher über die Bedeutung und die Wirkung des Kleides selbst noch gar nicht nachgedacht.

Einigen Kleidertheorien zufolge haben die Kleider einen Einfluss auf den Menschen, weil ein Mensch ursprünglich keine Substanz hat und weil die äußerliche Atmosphäre seinen Charakter und sein Existenz wandelt. Meines Erachtens gibt Bidermann dem Spiel *Philemon Martyr* diese Bedeutung, dass jeder anscheinend unerlösbare Mensch die Möglichkeit hat, zum guten Menschen zu werden, nur wenn er mit der äußerlichen Atmosphäre wie dem Christentum umhüllt wird.

Im vorliegenden Aufsatz untersuche ich die Praxis und die Entwicklung des Kleideraustausch-Motivs bei den drei Hauptfiguren Philemon, Apollonius und Arrianus. Dann entwickle ich die These, dass der Kleideraustausch die Bedeutung einer Neugeburt hat. Man könnte den Erwerb eines neuen Körpers mit den äußerlichen Einflüssen der Kleider vergleichen. Allerdings ist die Benutzungsweise des Motivs im Fall der einzelnen Figuren verschieden.

Das Kleideraustausch-Motiv im *Philemon Martyr* sieht zwar jetzt widersinnig aus, aber es stellt uns eine aktuelle und interessante Frage, nämlich die nach der tatsächlichen Wirkung von Kleidern auf die Menschen.